

マイケル・サンデル著『それをお金で買いますか—市場主義の限界』

読書感想文

経済学部経済学科
学生番号：01135026
豊島由里子

マイケル・サンデル氏といえばNHK番組「ハーバード白熱教室」で話題となり、日本でもベストセラーとなった『これからの「正義」の話をしよう—いまを生き延びるための哲学』の印象が強い。私自身はこれまでサンデル氏の本を読んだことはなく、何度かテレビ番組を観ただけであった。その中でサンデル氏は“善”というものに関して広く扱っているという印象を受けた。そのサンデル氏が市場について述べている本著は私にとってとても興味をそそられた為、本著を課題図書に選んだ。

本著ではサンデル氏は自らの主張を数多の具体例を織り交ぜながら著している。この感想文では特に興味深いと感じた具体例も取り上げつつ、彼の主張を受けて私が感じたことを各章に沿って述べていきたい。

1. 行列に割り込む

現代の社会で、お金で買えないものはどれだけあるのだろうか。2008年の金融危機によって市場勝利主義の時代は終わり、市場の能力には疑問が投げかけられたが、この問いに対して積極的に我々は取り組んでいるのだろうか。市場主義に限界があるのかもしれないと気づきつつも、売買の論理は生活の中のあらゆる場面に浸透している。日本にいたことが原因かもしれないが私はそのことをあまり実感していなかった。しかし本著の冒頭に上げられている具体例を読み、ある種の危機感を覚えた。以下はその一例である。

<お金を払うことで得られるサービス>

- ・刑務所の独房の格上げ（一晩8ドル）
- ・インドの代理母による妊娠代行サービス（6250ドル）

<お金を稼ぐ手段>

- ・体の一部分のスペースを広告用に貸し出す（777ドル）
- ・民間軍事会社の一員としてソマリアやアフガニスタンで戦う（ひと月250～1000ドル）

違和感を覚える部分もあれば、許容される範囲だと感じる部分もある。例えば第1章で取り上げられている、“行列を割り込む”権利はどうだろうか。遊園地などで行列に並ばなくても良い権利が販売されていた場合、もちろんその権利を買うだけの資金能力があれば

ば喜んで買うだろうし、買えないとしたら多少いらいらしながら「まあ、こんなもんか」とそのような状況に慣れていってしまいそうである。しかし同じ行列でも医師に診察してもらい予約券の転売には何故か拒否反応が出る。それはおそらく遊園地の行列への割り込みだったら待たされても死ぬ訳ではないが、医師の診察を待つ行列への割り込みは、治療費はあるが予約券は買うことができない患者が最悪の場合、亡くなってしまうかもしれないという不安が積みまとうからだろうか。しかし予約券の費用までが治療費に含まれると考えるとどうだろう。医療費が無料ではない社会で生きていたら、お金持ちがより良い医療を受けられるのは当たり前のことであるし、それを我々は受け入れている。そう考えたら予約券の転売も許容されても良いようにも感じてしまう。市場の論理を適用する理由はいくらでも思いつくが、適用してはいけない説得力のある理由をあげるのは難しいように思う。

2. インセンティブ

第2章ではインセンティブについて論じられている。例えばアメリカ、ダラスでは二年生が本を一冊読むたびに2ドル貰えるという仕組みがある。ダラスに限らずテストで好成績をとった者にお金を与えるという制度を採用している都市（学校）がアメリカでは増えている。これは金銭的インセンティブが教育改善の役に立つという考えが根底にある。しかしダラスの例を除いて、新たな制度の成果は成績に表れなかった。成績の向上そのものに重きを置き勉学に励むものもいれば、成績には関心を示さず独学する者もいるし、学問にも成績にも関心を示さず勉強しない人もいる。勉強しない人の中に金銭的インセンティブによって勉強をする人もいるだろうが、お金に興味の持てない人にとっては全くの無意味だ。なぜ金銭的インセンティブによって動かされると考えられるのだろうか。確かにお金は生きる上で必要不可欠であるし、多いに越したことはないが、お金を与えれば動くだろうという制度設計者の考えは不快に感じてしまう。それは人間の尊厳を侮辱する行為に感じられるからだ。

3. いかにして市場は道徳を締め出すか

生活のあらゆる場面に市場の論理が浸透することには2つの面から異論を唱えることができる。一つは公正の観点、二つ目は腐敗の観点である。公正の観点とは、お金を持つ者だけが様々な機会に恵まれ、サービスを受けられるのは不公平であるとする観点である。腐敗の観点では、モノやサービスが市場で取り扱われることによって、そのモノ、サービスの価値が腐敗するということである。例えば臓器売買について考えた時、臓器そのものは売買によって価値が失われることはないが、人間を物質視することになり、人間を侮辱しているとも考えることもできる。

この章ではお金で買えるもの、買えないものの違いについて論じられている。臓器売買や売春に拒否感を抱く人は多いだろうが、第3章で紹介されているほかの例だったらどう

だろう。例えば結婚式の祝辞などである。結婚式などに限らず、公の場で挨拶をしなければならなくなった時に、あたかも大統領がスピーチライターを雇っているように自分も他の人に原稿を書いて貰えたらどんなに助かるだろう。真心がこもった、つたないスピーチとお金で買った感動的なスピーチ。時間がなくてお金の余裕があったら後者を選択してしまう人が多いように思う。しかしサンデル氏が主張するように、この場合でも祝辞という今までは売買することができなかった分野に、市場の論理が入ってくることによって購入した祝辞の価値は、自分で考えた祝辞に比べて劣ってしまう。このように市場の論理が浸透することによって売買されるモノの価値が大きく損なわれてしまうことは多い。しかし、市場も論理の適用によって便利になったことも多いはずだ。だからこそこまで市場の論理が浸透している。市場の論理が踏み込んではいけない領域とはどこだろうか。

なぜお金が絡んだとたんに価値の腐敗というのがおこりうるのか。それはお金がモノやサービスの潜在価格を表出させる機能をもつからであるとサンデル氏はいう。例えば、私は時給750円で予備校事務のアルバイトをしているが、これは私の時間が750円で買われたともいえる。(私のアルバイト先の場合、時給は皆一律で能力給ではない。)ここで次のような疑問が生まれる。人の時間や能力に値段をつけるというのは人間の尊厳を失う行為ではないのか、という疑問である。なんとなく当たり前になってしまっているが、本来値段がつけられるべきか議論されるべき、もしくは何故値段が付けられているのか知っている必要がある事例も多いのではないだろうか。

4. 生と死を扱う市場

第4章では生と死を扱う市場を取り扱っている。身近にある生と死を扱っている商品は生命保険だろう。生命保険はいまや当たり前の商品であるが果たしてそれは道徳的に許されるものであろうか。欧州では何世紀にも渡り、人間の生に市場価格をつけることへの嫌悪感から、イギリスを除いて生命保険が禁止されていたが、今や何の抵抗もなく浸透している。これは生命保険という商品が時代にフィットし、消費者の需要も満たしているからだろう。一般的な生命保険商品は加入者の寿命が長くなればなるほど会社が儲かる仕組みである。しかしこれとは正反対の性質をもつ生命保険がアメリカで誕生してしまった。バイアティカル産業では、詳しい説明は省くが、加入者が亡くなるのが早くなればなるほど投資家が儲かるという仕組みで成り立っている。人の死をビジネスで取り扱っている例は今までもあった。例えば死体回収人などがそれである。しかし死体回収人とバイアティカル産業の大きな違いは、死体回収人はどんな死でも彼の生計を助けるが、バイアティカル産業では投資家は特定の誰かの死を儲けにしているという点である。この業界のことは本著を読んで初めて知った。よくこんなこと思いつくな、というのが最初の印象であった。しかし、次第にこのような産業が生まれるというのは当たり前のことのようにも思えてきた。生命保険が人の生で儲けを得ているなら、人の死で儲けることを考える人もいるはずだ。その人が仕組みを作って一定層に受け入れられたということだろう。人の生は儲けの

種にしてもいいのに、何故人の死は儲けの種にしてはいけないのか。バイアティカル産業を批判する前に、現在普及している生命保険についてよく考察することが必要だ。

5. 命名権

第5章では命名権について論じている。第4章で生と死を扱っている為、ここにきて命名権とは少々規模が小さくなったように感じてしまう。何故最終章でサンデル氏は命名権を取り上げたのだろうか。

まず冒頭では今や当たり前となったスタジアムの命名権について述べられている。そしてその後様々な分野に入り混んだ商業主義にまで話は進む。スタジアムに設置された富裕階級や特権階級のみが利用できるVIPルーム“スカイボックス”。スーパーに置かれている果物からパトカーに至るまで、あらゆる場面で見ることのできる（見ざるを得ない）広告。サンデル氏によると商業主義は特定の善に害を及ぼす以上に共通性を失い、お金で買えるものが増えるほど異なる職種や階層の人々が出会う機会は減っていく。これは社会にとって大きなマイナスであることは明らかだ。商業主義を全て否定する必要はない。しかし、とても小さな、取るに足らないような商業主義の侵入が結果的に大きな道徳的・市民的善を損なってしまう可能性があるのも事実である。

6. まとめ

市場の論理が様々なものに浸透していく時、それは徐々に我々が、気が付かない内に行われている。そしていずれ少しの疑問を抱くようになるが、市場の論理に合わせて生活していくと気が付いたら取り返しのつかないところにまで市場の論理は浸透していく。人は市場の論理を浸透させるのは得意でも、逆に市場の論理が浸透していた分野から市場の論理を撤退させることはとても難しい。何故なら非常の論理の撤退が必要な場合には道徳的観念が理由になることが大半であるし、道徳的観念の共有はとても難しい。そして特に日本では個人的な道徳的観念や倫理観について議論することを躊躇う傾向にあるように感じられる。小中学校の教科で「道徳」があり、今では正式に成績の付けられる教科として扱われている。どのような内容が取り扱われているのかは分からないが、教科としての「道徳」が道徳的価値観、倫理観の押し付けになっていないことを願う。大切なのは自分の中の道徳を主張できることであり、他の人の道徳感を受け入れて、時には正しく議論できることである。そして「道徳」に関しては、議論を踏まえて全体として1つの結論を出さないことも大事であるように思う。個人のもつ道徳を大事にするべきである。

この本を通じて私は自分の持つ道徳感に改めて向き合うことが出来た。「これは市場で取り扱っても良いが、あれはだめではないか。そう感じるのは何故だろうか。」直観的に判断していた市場では取り扱ってはいけないモノやサービスについて、何故直観的にそのように感じるのかをサンデル氏の言葉を借りながら、自分の頭の中で整理できたように思う。とは言っても市場主義が立ち入っていけない分野が明確になった訳ではない。これか

らも様々な本を読みながら、様々な人と議論するべきであり、安易に結論を出してはいけない問いであると感じた。

参考文献：マイケル・サンデル(2014) 『それをお金で買いますか—市場主義の限界』
鬼澤忍訳、早川書房